0. 報告日：2012 年　4 月　5 日（木）

1.訪韓期間と場所：2012 年 3 月 25 日（日 ）～3 月 31 日（日 ）、韓国：ソウル・江陵等

資料作成者

（所属、学年）
大分大学大学院工学研究科
建設工学専攻博士前期課程 1 年
（氏名）
岡本　大

2.交流・調査の着眼点

テーマ：地域のアイデンティティ

私はこれまで離島地域について研究を行う中で、地域のアイデンティティの重要性を感じている。本報では地域のアイデンティティを交流・調査の着眼点とし、各所の着眼点を軸に考察を行う。

3.調査記録（7.5 頁程度）

■2012/3/25　ソウル特別市（清渓川，北村，景福宮，南山タワー）

ソウル特別市においては清渓川，北村，景福宮，南山タワーの視察によって都市や景観の特徴を把握した。清渓川（図 1）は、高架道路を川へと復元した、人工河川である。それゆえ、ビルの合間を縫っているため歩行の際の圧迫感は否めず、街を下から見上げながら歩くという不思議な感覚があった。しかしながら、川沿いおよび広場を歩く人の姿は多く、オープンスペースの少ない都市内において魅力的な水辺空間となっており、人々の憩いの空間として機能しているということが確認できた。また、清渓川は総延長 8.12km にわたり市内東西に延びており、行きかうビジネスマンや観光客の姿が多くみられたことから、通り抜けの機能を果たしていることも考えられ、都市内に回遊性を生み出す一つの有効な手段であるのではないかと推測する。

図 1　清渓川

一方で北村（図 2）は、古い伝統家屋が建ち並んだ昔から変わらぬ風景が特徴的である。その独特の壁の模様と瓦から昔情緒を感じることができる。また、集落が斜面に並んでおり、集落上方からは眼下にソウルの開発地区を見ることができ、目の前に見

図 2　北村

図 3　北村集落の路地

える北村の景観とは対照的である。これは、都市部に伝統家屋が残っているだけでなく、集落が斜面に存在しているからこそ見ることのできる光景で、とても独特なものであった。現在北村は、その独特な景観を持つことから、観光の地として賑わっており、メインストリート（パブリックスペース）は観光客で溢れていた。しかし一歩路地（図 3）に入ると植木などから北村に住む方々の生活感（プライベートスペース）が出ており、メインストリートと路地の対局性のようなものを感じた。

北村と同様に景福宮もまた、ソウル中心部において昔から変わらぬ景観が残っており。歴史的建築物と開発された都市景観とのコントラストが印象的であった（図 4）。景福宮は建築物自体も独特の色使いがされており、日本にはない色使いに新鮮さを感じた。また、景福宮の背後には主山となる山が存在し、北村から景福宮を俯瞰した景観が風水景観であるということが確認できた。

南山タワーからソウル市外を俯瞰した光景（図 5、図 6）からは、高層化する都市の様子を把握することができた。隙間なく高密かつ均質に並ぶビルの様子から、とにかく高くて大きな建築物を建てるというような雰囲気を感じ、都市部における建築のあり方と居住環境を考え直すべきであると強く感じた。中心部から少し離れた山裾などに張り付くように集合住宅が配置されており、また高密に高層ビルが並んでいる傾向が見られ、こうした都市郊外の集合住宅の居住環境を考える必要がある。

図 4　景福宮

図 5　高密度で立ち並ぶ高層ビル群

図 6　南山タワーから見たソウル特別市

■2012/3/26　ソウル特別市（タワーパレス，I park，COEX）・江陵

ソウル市外のメインストリートは、高層ビルが立ち並んでおり（図 7)、迫力のあるものだった。通りいっぱいいっぱいにビルが迫ってきており圧迫感を感じた。1 階部分をセットバックさせた建物も見られたが、セットバックしたことによってできた空間が有効に活用されている光景は見られなかったように思う。上述の通り、ビル群からの圧迫感は感じたものの、歩道自体は、歩行するのに十分なスペースが確保されており歩きやすく感じた。また建築意匠としてはカーテンウォールのビルが多く見られ、地震の少ない韓国ならではの意匠であると推測した。

COEX（図 8）は江南地区の大型ショッピングモールである。視察日当日はオバマ米大統領訪韓もあり、周辺は異様な雰囲気で普段の様子を見ることはできなかったが、上述で示したように、ここでもカーテンウォールが使用されており、韓国の都市を象徴する意匠であることが確認できた。

図 7　ソウルの街並み

図 8　COEX

高層化するソウル郊外の集合住宅の代表的な例がこのタワーパレス（図 9）である。周辺には住民の憩いの場とする川が設けられており、近隣住民がウォーキングをする姿（図 10）も見られた。このような高層マンションにおいて、周辺に人工的でも自然を取り入れることで憩いの空間として機能していることは確認でき、また河川環境自体も悪くはないと感じた。しかしながら、最高 66 階の高層マンションはそれ自体が居住空間として適しているかは疑問に感じた。

図 9　タワーパレス

図 10　タワーパレスの周辺環境

■2012/3/27　江陵

「離島地域の空間利用特性と島民の生活行動にみる住環境満足度の評価」と題し、卒業研究の成果報告を行い、先方の学生、教員等との研究交流を行った（図 11）。英語で研究発表を行い、また質疑応答において互いの研究に対する意見交換を行うことで、国際社会におけるコミュニケーション能力の向上となった。韓国では島に対して日本ほどなじみがなく、盆踊りなどの文化もないことから、それらに関する質問もあり、日本にはない視点からの意見を聞くことができた。また、先方の学生の発表を聞くこと、パネルや模型などの作品を見ることで、海外の建築学生のレベルを知ることができ、国際社会における自らの相対的位置を確認することができた。

図 11　江陵大学校での発表の様子

地方有形文化財に指定されている鏡浦臺は、江陵の月見スポットとして有名である。小高い丘の上にあり目の前に鏡浦湖を臨むことができ、周辺環境との調和を大切にする韓国の歴史的建造物の特徴を確認することができた。内部に書かれた鏡浦賦からは、鏡浦臺がこの場所にあることにストーリー性を感じ、この土地にしか建たないという固有性が見られた。

図 12　鏡浦臺

また、ソウル景福宮同様に独特の色使いがなされており、その容貌は目を引くものであった。上述にもある鏡浦湖周辺は現在美しい自然に囲まれているが、江陵市によると気候変化に対応する都市になるべく、戦略として「緑」が掲げられていた。風などを考慮して緑が配置され、公園面積を増やす狙いもある。新たに設けられる自然と一体となったオープンスペースが適切に機能するのか、また美しい景観を保存できるかが課題であると考える。

図 13　烏竹軒

図 14　船橋荘

烏竹軒（図 13）は、韓国の住宅建築の中でも最も古い木造建築のひとつである。また、韓国紙幣の５千ウォンに描かれていることでも有名で現在も美しい外観を残している。
瓦屋根が周辺の自然と調和しており美しい。床下暖房である「オンドル」が印象的であった。また、各所に門が設けられており、それぞれの空間を区切っていることが確認できた。

上流階級の家屋である船橋荘（図 14）で印象的だったのは、空間構成である。男女および仕える人の空間が分けられており、各所においてこの様式は見られ意匠の統一が図られていた。また、屋根の瓦が並んでいる様子はとても美しい。背後には小高い丘があり風水景観と推測される光景も見られた。

■2012/3/28　太白山,三亀亭

太白山において緑の景観と都市景観の調査を行った。風水思想において、気の流脈とされ、また韓国の背骨とされる太白山と小白山脈の分岐点に位置していることから重要な山である。山頂付近からの周囲の景観（図 15）は、山が幾重にも折り重なるように位置していることが確認でき、この地が風水の地であるということを感じた。この重畳感は韓国の景観を理解する上で重要な要素だと理解する。

図 15　太白山頂からの景観

安東市の三亀亭（図 16）に関して最も印象に残ったのは、歴史的建築物や風水樹の空間的関係性である。他の建築物や風水樹が互いに関係性を持って存在し周辺環境（図 17）との調和が図られているという点に、ここでも韓国の景観構成において重要な概念である風水思想を確認することができ、景観についての理解を深めることができた。また建築物自

図 16　三亀亭

図 17　三亀亭の周辺環境

図 18　三亀亭の梁の様子

体の構造（図 18）として、梁が水平方向にのみあることや、基礎に鋭利な石を並べてある点などが興味深かった。

■2012/3/29　安東（河回村，屏山書院）

世界遺産である河回村、韓国の歴史的建築物である屏山書院の視察を行った。河回村においては、その周囲を取り巻く川（図 19）が最大のアイデンティティであると感じた。「囲まれている」という点において離島地域にも似た感覚を覚えた。一定範囲で集落が形成されることによって統一された建築物と畑（図 20）が美しい景観を作り上げていると感じた。茅葺き屋根（図 21）もこの集落の特徴である。集落内にご神木（図 22）は出産と子供の成長を助けるとされ、人々の心の支えとなっていたことが読み取れる。平面構成に関しては、船橋荘と同様に男女、仕える人、馬小屋が分かれており、この様式は集落の家屋全体に見られた。また、河回村では村の豊作を祈願するためのソニュウチュルブルノリという祭りが存在し、この集落のソフト面のアイデンティティとなっている。

図 19　河回村を囲む川とその周辺環境

図 20　集落と畑

図 21　茅葺き屋根

図 22　塀越しに見るご神木

屏山書院は朝鮮時代代表的な儒教的建築物である。今回の韓国視察で最も感銘を受けたのがこの屏山書院（図 23）だった。屏山書院の最大のアイデンティティはその周辺環境にあると考える。立教堂から晩対楼こしに見る屏山（図 24）の距離感が絶妙であり、周辺環境と建築と自分の位置関係はどこをとっても気持ちのいいものであった。立教堂の背後には開口があり（図 25）、そこから見えるサルスベリの木は見る角度によって背後との位置関係を変え、まるで動く絵画のようであった。このように、周辺環境との調和を重んじる風水的概念や、それによって形成された景観など、日本の建築物にはない特徴を確認することができた。また、屏山書院は、釘を使わない貴重な木造建築として、当時の建築技術を残した貴重な歴史的財産としても有名である。

図 23　晩対楼からの屏山

図 24　立教堂からの屏山

図 25　立教堂背後の開口

俗離山法住寺（図 26）は、韓国唯一の五重木塔形式の建築物である。第一印象として、日本の五重の塔と比較するとずんぐりとしたフォルムである。また、色使いは日本のものと比べると色鮮やかであった。五重の塔だけでなく、高さ 33m で世界最大の単一仏像である青銅弥勒仏があり、五重の塔よりもむしろこちらのほうが異彩を放っていた。

図 26　俗離山法住寺

■2012/3/30　大田（ハンバット大学校）

「離島地域の空間利用特性と島民の生活行動にみる住環境満足度の評価」と題し、卒業研究の成果報告を行い、先方の学生、教員等との研究交流を行った（図 27）。我々の研究に対する質問から、日本と韓国との文化の違いを感じることができた。また、互いの研究に対する意見交換を行うことで国際社会におけるコミュニケーション能力の向上となった。

図 27　ハンバット大学校での発表の様子

■2012/3/31　釜山

釜山を視察し、釜山のアイデンティティとなる特徴は大きく 2 点であると感じた。まず 1 つ目は港街という点である。港街であるため、市場や多くの海産物を扱った商店が建ち並び（図 28）、この地域にしかない独特の雰囲気を出しているように感じた。それは活気のあるもので魅力的な部分であると考える。２つ目の特徴は高層化である。釜山の街を訪れ、まず目を引いたのがこの高層ビル群だった。砂浜に高層ビルという光景（図 29）は近代都市を思わせ、とても印象的な光景であった。この光景は釜山を象徴するものだと感じた。一方で、この高層化は都市問題の一部と捉えることもでき、特に視察に訪れた I park（図 30）においては、韓国都市の高層ビル現況および都市部における高層化の問題点として、高層ビル周辺の日照やオープンス

図 28　プサンの市場の様子

ペース・緑の少なさなどの環境の劣悪さがみられた。また、釜山では近代建築物が多く見られた。とくに視察に訪れたシネマセンター（図 31）はとても独創的な外観であり目を引くものであった。しかし、上述してきた歴史的建築物とは対照的に、周辺から浮いた印象を受け、これからの建築のあり方について歴史的建築物をもとに考え直す必要があると感じた。

図 30　I park

図 29　高層化した釜山市

図 31　シネマセンター

4.　全体の感想と今後の抱負（半頁程度）

今回の韓国視察では研究交流と、都市および建築物視察を行った。

研究交流においては、英語で研究発表と質疑応答を行うことにより、国際社会におけるコミュニケーション能力の向上となった。研究内容に関する質問からは、文化の違いを感じることができ、自国の都市について他国と比較するいい機会となった。また、先方の学生の発表から、海外の建築学生のレベルを知ることができた。一方で、課題として自らのコミュニケーション能力向上が挙げられ、国際社会で通用するための英語力の向上が急務であると感じた。

都市および建築物視察において、地域のアイデンティティを調査の着眼点とし、各所の着眼点を軸に考察を行った。韓国の歴史的建築物は、それ自体が地域のアイデンティティとなり得、またそれら歴史的建築物の特徴として自然との調和や、色使い、マンドルなどが挙げられた。また韓国の都市部においては、高層化やカーテンウォールなどが特徴として挙げられる。どの地域においても、それぞれ良い点と問題点があると思うが、今回の視察において、その地域のアイデンティティと言えるものが多い地域ほどまたはそれが強い地域ほど魅力を感じた。これは、これまで行ってきた離島地域にも通ずるところがあると感じている。これからの地域において、人々が魅力的だと感じるアイデンティティを自分自身も考えていく必要がある。